

論文審査の結果の要旨

平成 26年 7月 26日

本論文は、日本統治時代の台湾における文学・文学運動史を包括的に論じたものである。本論文では、先行研究を参照しながら、この時期の台湾の文学を、漢詩の伝統を引き継ぐ文学（つまり「旧文学」）と、1920年頃から始まる「新文学運動」という区分に分けた。そして筆者は、これらを異文化理解と多文化共生という視点から捉え直し、旧文学においては台湾と日本が漢詩を連結器として共存していたこと、新文学においては、文学運動が日本語・日本文化に対し抵抗と受容という矛盾した態度を抱えながら進行していたことと、郷土文学論で台湾と中国の文化の同一性についての論戦があったことを述べた。さらに新文学運動での言文一致運動についての詳述していることから、結局、台湾の言語・文化は内的には新旧文学の拮抗を、外的には、台湾語・台湾文化と日本語・日本文化、中国語・中国文化との対立と共存を経験していたことを論じており、非常に興味深い内容と言える。また、このような台湾の文学形成を論じるにあたって、ポストコロニアル的な視点も取り入れられ、東アジアの近代文学研究に貢献しているという点でも評価できる。その反面、多くの情報を概略的に述べたため、作家や詩人の背景や当時の言語状況などやや説明不足と思われる点があった。また、論文には、用語の不統一や参照文献の情報の欠落が若干見られた。しかし、論文の質に大きな影響を与えるものではなく、博士論文として十分なレベルにあるものと考えられる。

主査（職・氏名） 准教授 吉田 朋彦